

パウロの手紙は新約聖書の4分の1以上を占めます。中でもテサロニケ書簡は、パウロがクリスチャンになってからの最初期の作品です。パウロの人物像を『サウロ、回心以前のパウロ』（ヘンゲル著）を参考にして、しばらく考察していきたいと思います。

使徒言行録は、パウロが地方総督セルギウス・パウルスに伝道したことをきっかけに(13:9)、ヘブル語名サウロからラテン語名パウロに切り替えますが、これは偶然の一致で、当時のユダヤ人は中間時代以来、ヘブル語名のほかにギリシャ語名やラテン語名を持つ者がいました。

サウロのヘブライ語の語源は「シャーウル」で「主に奉獻された者」という意味です。名前はその子に一生影響を与えるのでしょうか。サウロは「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった」(ガラテヤ1:15)と自己紹介しています。

サウロはベニヤミン族出身のイスラエル初代の王と同名であること、自身がベニヤミン族の出身であること(ローマ11:1)、ヘブライ語を話す生粋のユダヤ人であること(フィリピ3:5)を誇りに思っていました。

サウロが生まれたキリキア州のタルソスは学問の盛んな都市で学校や哲学者たちの講義所がたくさんありました。サウロの父親はユダヤ人でありながらローマ市民権を持った裕福な家で、ファリサイ派的な性格を持った厳格なユダヤ教徒としてサウロを育て、教育を施しました。

サウロはシナゴグで学びユダヤ教のほかにギリシャ語も学び、若い時からエルサレムに留学して、当時随一の学祖ファリサイ派ガマリエルの門下生となりました(使徒22:3)。サウロの人格と学問の実質的な成長はほとんどエルサレムでなされました(使徒26:4,5)。

当時のユダヤ人の宗教状況についてヨセフスは「そのころユダヤ人の中には、人間の営みについてそれぞれ異なる見解を持つ三つの宗派(ハイレーシス)があった。すなわちファリサイ派、サドカイ派、エッセネ派である」(『1マカヤ古代史』13:5:9)と述べています。ファリサイ派はサドカイ派とエッセネ派両極端の中庸を保っていました。しかし「ナザレ派の分派」に対して中庸を保とうとしたガマリエル(使徒5:33-39)を超えて、サウロはキリスト教迫害の急先鋒として、サドカイ派の大祭司に組して働き、大祭司と長老会全体からのお墨付きをもらい(使徒9:1,2,22:5)、ステファノの処刑にも立ち会って手伝いました(使徒8:1)。

後にパウロは自分の過去の行動について「熱心さの点では教会の迫害者」であった(フィリピ3:6)と回顧しています。サウロをここまで激しく駆り立てたものは何だったのでしょうか。(続く)